価値形態論の原理論的再構築

―時間性・空間性・視座・動機の観点から―

2020/09/05

今井慧仁

序　貨幣の価値

昨今、貨幣の価値をめぐる議論が再び活気付いているように思われる。その背景としては、ビットコインをはじめとする数多の仮想通貨の登場、従来の主流派の商品貨幣説を批判する形で提唱された MMT の存在などがあげられる。しかしながら、商品貨幣説批判は何も今日になって始まったものではない。1971 年のニクソン・ショックによってドルと金との兌換が停止されて以来、商品貨幣説に基づく主流派の貨幣理論の存在意義が危ういものとなっていたのは事実である。さらに遡れば、ドイツの歴史学派やケインジアンなどは一貫して貨幣国定説、あるいは信用貨幣説を主張してきた。したがって、本来であれば管理通貨制度の導入時、あるいは変動相場制への移行期にきちんと議論されるべきであった貨幣の価値をめぐる議論が、21 世紀の今頃になって、さもパラダイム・シフトであるかの如く取り上げられていることは、筆者には非常に奇異な事柄として映る。とはいえ、貨幣の価値や本質をめぐる問いは資本主義を考察する上で非常に重要であり、時期を問わず常に探求されねばならないものであることもまた、確かであろう。

筆者にとって、貨幣を考察する上での参照軸となってきたのはカール・マルクスの『資本論』冒頭に登場する「価値形態論」の議論である。この議論は従来、商品から貨幣がいかにして導出されるかについて論証した貨幣発生論として解釈され、他の経済学派からは商品貨幣説の亜種として捉えられてきた。もちろん、このような通説に対するマルクス主義経済学の側からの批判も数多く存在するが、その内容は論者によって千差万別であり、そのすべてを網羅的に検討することは非常に困難を極める。そもそもマルクスの記述自体に論理的な錯綜が見られ、彼の真意を見極めること自体が難しいのだ。したがって、筆者としてはむしろ、マルクスが提起した価値形態論という領域をマルクスの専有物とするのではなく、資本主義の理論的考察における本質的な議論として、一旦マルクスの「真意」とは切り離して考察した方が良いのではないかと考えている。そしてその上で、価値形態論に対する主だった論者たちの解釈（マルクス本人もここに加える）を俎上にのせつつ、価値形態論で議論すべき目的や意図、およびこの議論において背後に想定されている理論的条件を再度明確にし、今日の資本主義分析にも活かせる形で再構築すべきではないだろうか。

本稿の前半部分では、価値形態論をめぐる様々な学説の中から、筆者の力量が許す範囲で取り上げることのできるものをいくつか取り上げ、後半部分ではそれを踏まえた上で、筆者なりの価値形態論を提示しようと思う。もちろん、筆者の提示する価値形態論はマルクス固有の価値形態論の論理展開からは外れるものではあるが、本稿の目的がマルクスの価値形態論に対する学説的に正統な解釈を施すことを目的としたものではないことは先に述べた通りであり、むしろ価値形態論の理論的再考における一試論という立場での記述であるということはあらかじめ断っておく。

1-1　価値形態論をめぐる学説史

カール・マルクス

- マルクスの『資本論』第一巻第一章は「商品」についての議論から始まる。スミスが分業論を経済学の始点とし（『国富論』）、リカードが人間労働に還元される価値から説き起こした（『経済学および課税の原理』）のに対し、マルクスは価値と使用価値の二要素からなる商品形態でもって資本主義の抽象作業（下向法）を止め、そこから上向する形で『資本論』を展開する。このとき問題となるのが、この冒頭商品とは如何なる商品であるかということである。マルクスは「資本主義的生産様式が支配的に行われている社会の富は、一つの「巨大な商品の集まり」として現われ、一つ一つの商品は、その富の基本形態として現われる。それゆえ、われわれの研究は商品分析から始まる[1]」と述べており、これは明らかに資本主義的な商品を想定していたと考えられる。
- もちろん、資本主義の抽象を通じて明らかにされた商品であるから、これが資本主義的商品であることは自明のことであると思われるかもしれないが、問題は、『資本論』の展開がまずもって生産過程を説明し、その生産過程から生産された結果としての資本主義的商品を説明していない点である。冒頭の商品は資本主義的な生産領域を捨象した形で展開されており、その意味で、流通形態として抽象されたこの商品形態は、資本主義的生産様式の成立以前にも存在していた歴史的単純商品の商品形態とも共通の性格を持つことになる。したがって、価値形態論で扱われている内容が資本主義における商品―貨幣の価値の問題を扱っているのか、歴史的単純商品にも当てはまる価値の問題を扱っているのかが不明瞭になっている。

ベーム・バヴェルク/ルドルフ・ヒルファーディング

- オーストリア学派のベーム・バヴェルクは、『資本論』第一巻の冒頭商品論においては、等労働量交換として投下労働量により価値の実体規定を与える価値法則を説いているのに対し、第三巻の生産価格論においては、平均利潤に基づく生産価格交換を説いている矛盾を指摘した。
- ベームに対する反批判を試みたのがヒルファーディングである。彼によれば、『資本論』冒頭の商品はあくまで歴史的単純商品であり、この段階では等労働量交換としての価値法則が貫徹される一方、第三巻の商品は資本主義的生産様式に基づく資本主義的商品であって、こちらの側では平均利潤に基づく生産価格が成立するということになる。これにより、『資本論』内部では価値から生産価格への移行が生じているという考えが提示されたわけであるが、本稿との関係でいえば、ヒルファーディングは『資本論』の展開を歴史的な発展に擬えて解釈したということ、そのため、価値形態論の議論が、資本主義以前の商品の価値を扱ったものとしてみなされた点が重要になる。

河上肇/櫛田民蔵

- 戦前の価値論論争は河上肇と櫛田民蔵との間で行われた。河上肇は『資本論』冒頭の商品規定は、資本主義の現実を基礎とし、そこからの抽象によって見いだされるものであると考えた。彼の解釈によ

[1] Marx[1867]p.49 を参照。

れば、資本主義的商品は通常は生産価格という具体的な装いでもって表現されるが、その抽象的な本質は価値の側にあるのである。価値と生産価格は資本主義的商品の抽象的規定と具体的規定との違いということになる。

- これに対し櫛田民蔵は、マルクスが提唱した唯物史観は本来、具体的で歴史的な事実に立脚した理論であること、したがって抽象性よりも歴史的具体的な事実を重視し、価値から生産価格への転化も歴史的発展に即したものとして解釈すべきであると主張した。櫛田の議論はヒルファーディングの焼き直しではあるが、河上もまたこの批判を受けて、歴史的単純商品説に傾倒していくようになった。

宇野弘蔵

- 戦後、河上肇とは異なる形で冒頭商品を資本主義的商品であると主張したのが宇野弘蔵である。宇野は「商品経済の理論としての経済学の分析においては、いかに抽象的なる商品を扱うにしても、それはすでに資本主義社会のごとく全面的に商品交換の行われていることを前提としているのであって、これをいわゆる単純なる商品として具体的に歴史的に資本主義以前の商品となすことはできないのである[2]」と述べる。宇野によれば、『資本論』は資本主義の歴史的発展段階を記したものではなく、イギリスの資本主義を模写する形で、資本主義社会に貫徹する法則性を原理的に抽出したものであるということになる。
- 宇野は冒頭商品を資本主義的商品として規定すると同時に、マルクスの価値形態論を独自に編み直す。『資本論』においては、商品の価値表現が貨幣によって可能となる過程を商品の視点で記述する価値形態論とは独立に、商品所有者（人間）を主体とした交換過程を通じて貨幣の発生を説く交換過程論が存在していたが、宇野は後者を前者に繰り込む形で一本化し、価値形態論を商品所有者の視点から記述し直したのである。この背景には、商品交換において商品所有者の欲望を捨象することはできないという宇野なりの考えがあった。
- また宇野は、商品の価値の実体は抽象的人間労働であるというマルクスの議論に関して、生産過程を捨象した流通の領域、あるいは価値形態論の段階で生産過程にあたる抽象的人間労働を持ち出すのは早計であるとしてこれを退け、まずもって価値の形態規定を行い、その上で価値の実体規定に進むべきであると主張した。このような発想は、宇野の『経済原論』における流通論、生産論、分配論という三段階の論理展開へと結実していくことになる。

久留間鮫造

- 宇野が価値形態論において商品所有者とその欲望が捨象されてはならないと主張したのは、雑誌『評論』（河出書房）1947 年 1 月号以降の連載座談会「資本論研究」においてであるが、この時の宇野の主張を批判する形で『価値形態論と交換過程論』を執筆したのが久留間鮫造である。価値形態論と交換過程論を一本化する宇野に対し、久留間は「「価値形態論では貨幣の「如何にして」が論じられ、物神性論ではその「何故」が論じられるのに対して、交換過程論ではその「何によって」が論じられるのである[3]」とし、価値形態論と交換過程論の役割を明確に峻別する。その上で久留間は、「ある特定の商品を等価形態に置くのは商品所有者の意識的な行為であり、したがってまた、普通の人間悟性でわかる世界の

[2] 宇野［1947］28 頁を参照。

[3] 久留間［1957］40 頁を参照。

ことであるが、等価形態に置かれた商品の使用価値が相対的価値形態にある商品の価値の形態になるのは所有者の意識から独立した過程であり、人間の代りに商品が主体として振舞うところの、そして人間語の代りに「商品語」が語られるところの物神の世界のことである[4]」と述べ、価値形態論はあくまで商品主体で語られるべきであるとの考えを打ち出した。

- 久留間の『資本論』解釈をおおまかに素描すると以下のようになる。すなわち、まず資本主義社会における商品価値の本質、すなわち価値実体が抽象的人間労働によって規定される。しかし、現実において商品の価値が即座に抽象的人間労働によって表現されているわけではなく、実際には市場における貨幣を媒介とした現象形態として、すなわち交換価値として立ち現れることになる。これが価値形態論の内容であり、価値の実体規定から形態規定へ、という順序がこれで明らかになる。しかし、久留間によれば、商品の価値表現とその価値実現とは別の事柄であり、価値の実現には交換の担い手である商人が別途必要となる。こうして価値の実現過程として、価値形態論とは区別される交換過程論が要請されることになるのだ。

廣松渉

- 宇野と久留間の対立を踏まえつつ、価値形態論にドイツ観念論や現象学の認識論的な議論を交えることで、独自に物象化論を構築したのが廣松渉である。彼は『資本論の哲学』において、全体的に宇野と久留間の折衷となるような議論を展開し、以下のように語る。すなわち「宇野・久留間論争を意識して一言しておけば、二商品の等置・交換の過程という事実の問題は、もとより、当事主体たる商品所有者の「欲望」をぬきにしては成立しえない。とはいえ、価値形態論が、謂うなれば quid juris に関するかぎり、当事主体の欲望という対自的な意識次元は具体的な内実においては捨象されうる。それは確かである。しかし、このことから、もし当事主体の視座〔の扮技〕を没却してしまうとき、価値形態論理解への最大の難関をなすあの「廻り道」および第二・第三形態の逆倒の論理構造を概念的に把握することが困難になるであろう[5]」と述べる。これは換言すれば、現実の交換過程において商品所有者が存在していることは明らかであるものの、価値形態論の記述においては商品所有者の欲望は捨象しても構わないということ（ここまでは久留間的である）、しかし他方で、価値形態論の第二形態から第三形態における逆転の論理を商品語だけで語るのは困難であり、商品所有者という当事主体の視座が必要になってくるということ（ここは宇野的である）になる。
- 廣松の物象化論を解釈することは本稿の意図からは逸れるため割愛するが、廣松による上述の指摘は非常に示唆的である。すなわち、廣松本人が意識的であったかどうかはともかくとしても、価値形態論において商品所有者という主体の存在が必要であるということと、商品所有者の欲望が捨象不可能であるということとは、さしあたっては別の事柄として切り離すことができるということである。宇野および彼を継承する宇野派にあっては、主体（の観点）の必要性と欲望の必要性とがほぼ同一線上で語られてきたのに対し、廣松は両者の間に境界線を引き、価値形態論解釈においては前者を積極的に、後者を消極的に捉えているのである。

---

[4] 同上 82 頁を参照。

[5] 廣松渉［1974］180-181 頁を参照。

1-2　宇野弘蔵の特異性と宇野派におけるねじれ

- 第一節では複数の論者による価値形態論解釈を紹介したが、この中でも特異なものとしては、やはり宇野弘蔵の価値形態論があげられる。なるべくマルクス自身の価値形態論に忠実であろうとする久留間の説を一方の軸として意識しつつ、それに対する宇野弘蔵の価値形態論の特殊性をまとめると、大きくは以下の三点にまとめられると思われる。
  ① 冒頭の商品論（価値形態論）は生産過程を捨象した純粋な流通論の領域であるということ。そのため、価値の実体規定としての抽象的人間労働がこの段階で登場する余地はないということ[6]。
  ② 価値表現を行うのは商品ではなく人間である商品所有者であり、価値形態論は交換過程論的に、人間語でもって書き直されているということ。
  ③ 価値表現を駆動する動機は、商品所有者が他人の商品の使用価値に対する欲望である。価値形態論の出発点は、リンネル所有者が自身の商品（リンネル）に他人の商品（上着）を等置することではなく、他人の商品（上着）に自分の商品（リンネル）を等置することであるということ。
- 先述の通り、宇野派において②と③の差異はあまり明確に意識されてこなかったが、①に関しても、生産過程を捨象した純粋な流通領域をめぐっては、それが一体どのようなものであるのかについて、宇野自身および宇野派の学説内においても、解釈にぶれが存在してきたように思われる。というのも、①のような純粋な流通領域の抽出は、宇野派以外からは、価値形態論を歴史化したものとして捉えられたからである。例えば、久留間の影響を受けた尼寺義弘は以下のように述べている。
  「（宇野）氏は、「共同体と共同体との間で出てきた形態」が、その内容としての実体をつかまえたのが、資本主義であるのだから、「証明の方法」は、形態が第一に説かれるべきだとして、商品形態を歴史的にみておられる。したがって、価値表現を歴史的な商品の発生に関係づけて主張されるのである。（中略）氏の主張をよく検討するならば、氏の価値形態論は物々交換から貨幣の出現までの過程の「一面を抽象した形態規定」ではなくて、歴史的な過程そのものであることがわかる。なぜなら、他の使用価値にたいする欲望の表現である氏の価値表現は、歴史的な商品交換の最初の発生の過程すなわち使用価値と価値の未分離の段階の交換関係を述べたものであり、さらにまた氏の価値形態の展開は「交換欲望」の拡大過程を述べたものであるからである[7]」。
- 宇野派の特異性は、価値形態論を交換過程論に寄せる形で記述し直したことで、本来、商品交換およびその流通手段としての貨幣の歴史的発生の場として捉えられてきた「共同体の果てるところで、共同体が他の共同体または他の成員と接触する点[8]」（「交換過程論」）を、価値形態論が語られる理論空間に移植した

---

[6] 宇野は『経済学方法論』において以下のように述べている。「諸商品が、貨幣形態をもって示すその同質性は、いうまでもなく互いに交換されうるものであるということにほかならないが、それは例えば物が自然的に有する重さというような同質性と異なって、その同質性にもとづいて比較せられ、交換せられるというものではなく、交換関係を通して比較軽量せられつつ要請せられ、確立されるという、いわば社会的に形成された同質性である。先ず実体が与えられて形態が展開されるというのではない。形態の発展自身がその実体的根拠を得ることになるのである」（宇野［1962］173 頁を参照）。

[7] 尼寺［1978］107-108 頁を参照。

[8] Marx[1867] p .102 を参照。

という点にある。したがって、久留間や尼寺からすれば、宇野派は価値形態論を歴史的に解釈しているということになる。しかしながら、1-1 でも触れたとおり、宇野自身の考えとしては、価値形態論はあくまで資本主義的商品の抽象的記述のつもりであった。

- 宇野派の中でも、山口重克らを中心とする純粋資本主義派は、価値形態論で扱われている領域が「純粋資本主義」という理論的に抽象化された資本主義内部での話であることを強調し、これを歴史的な貨幣発生論として解釈することを断固として拒否してきた。これに対し、鈴木鴻一郎や岩田弘を中心とする世界資本主義派は、生産論に先行する流通論（および価値形態論）を、資本主義成立以前の歴史的な領域と見なした、ないしそのように純粋派から認識されてきた。したがってこの限りにおいて、久留間派的な見地からすれば、宇野弘蔵およびそれに連なる純粋派は、実質的には価値形態論を歴史的に解釈しているにもかかわらず、それを理論的であるかのごとく主張している点で自己矛盾をきたしており、世界派のほうこそむしろ、宇野以上に宇野的であるかのごとく映るわけである。
- もちろん、純粋派あるいは世界派を一括りにして論じることは実際には不可能であり、両者内部においてもさらに細かな差異が存在することは確かである[9]。しかし、価値形態論において議論すべき軸を明確に定めないままに、これらすべての学説を逐一検討していくことは、あまり有意義なこととはいえない。したがって 2-0 では、宇野的価値形態論の特異性として上述した①②③を、価値形態論を考察していく上での重要なポイントとして、より一般的に定式化し直した上で、2-1 から 2-4 にいたる議論との橋渡しをしようと思う。

2-0　価値形態論の条件規定

- 価値形態論は非常に抽象度が高いがゆえに、その論理的展開がなされる理論空間の枠組みが明瞭ではない。したがって、以下にあげる四つの点によってその枠組みの輪郭を明らかにしたいと思う。

①　価値形態論が想定している時間性
②　価値形態論が想定している空間性
③　価値形態論の分析における視座
④　価値形態論に貫徹されている動機

- ①は価値形態論がどのような時間的設定のもとで展開される論理なのかということである。これは換言すれば、価値形態論で扱われる商品が歴史的単純商品なのか、資本主義的商品なのか、それとも抽象的に記述された商品一般のことなのか、ということになる。
  ②は価値形態論が展開される空間が、どのような場所を想定しているのかという問いである。これは、①と密接に結びついているが、要するに、資本主義的市場内部における諸商品関係を扱ったものなのか、資本主義的商品と他の生産様式による商品とが接する地点（「共同体と共同体の狭間」）での諸商品関係を扱ったのか、あるいは国内市場か国際市場かといった問いとして言いかえることができる。

[9] 例えば、侘美光彦の『世界資本主義』においては、同じ世界派として括られる鈴木と岩田の間にも、流通論解釈をめぐって無視しえない大きな差異が存在することが指摘されている。

③は価値形態論が商品の視点で語られるものなのか、人間の視点で語られるものなのか、という論点である。この③の解決は、②の論点の延長線上で解決されるが、ここでのポイントは「主体」になる。④は価値形態論がどのような動機によって駆動されているのかという論点である。従来の宇野派は、商品所有者による他の商品の使用価値への欲望によって、この問いに対する答えとしてきた。しかしながら、このような動機によって貨幣の導出過程を論じるというのであれば、スミスやメンガーによる貨幣論と同様の内容に帰着する。筆者は、使用価値への欲望ではなく、マルクスが強調していた価値表現の欲望を軸とした価値形態論を重視したいと考えている。

2-1　価値形態論の時間的規定

- 価値形態論で扱われている商品がいかなる商品であるかについては、第一節で触れたとおり、宇野派内部でも数多くの議論が存在してきたが、戦前にヒルファーディングや河上、櫛田などの議論で登場した、歴史的単純商品か資本主義的商品かという二項対立図式はあまり有効ではなくなっており、むしろ資本主義的商品か、歴史的単純商品をも包括する商品一般のことか、といった対立のほうが戦後は重要になってきたように思われる。ここでは、大内秀明のまとめ（大内［1977］）を引用する。
「冒頭商品の性格は、たしかに資本主義的生産様式にかかわる商品であり、その意味で資本主義的商品ではあるが、にもかかわらず流通形態として抽象された商品形態にすぎないのである。そして、流通形態として抽象されてしまえば、そのかぎりでは資本主義的生産様式以前の歴史的単純商品とも商品形態としては共通した性格をもつことになる。こうして、はたして冒頭商品の性格は、資本主義的商品なのか、それとも歴史的単純商品なのか、といった古くからの論争問題が提起されることになったのである[10]」。
大内は以上のように述べた上で、冒頭商品についての主だった解釈を以下の三つにまとめる[11]。

1　岡崎栄松や佐藤金三郎などは、商品を流通形態として純化することは、資本主義的商品からの抽象という意味を損ない、むしろ歴史的単純商品からの抽象になるという宇野への批判的見解。
2　宇野の流通形態の純化をみとめる立場にたちながら、それだけに共同体間の商品経済における歴史的単純商品との形態的共通性を強調する鎌倉孝夫、永谷清などの見解。
3　流通形態の純化は、むしろ資本主義的商品からの抽象によってのみ可能であり、歴史的単純商品との形態的共通性は抽象の結果にすぎないとみる大内秀明などの見解。

- 上であげられている 3 つのうち、3 は資本主義的商品と歴史的単純商品との形態的共通性を容認しているという点で、本質的には 2 の変形である。従って、結局のところ 1 と 2 との対立に還元される。そして、筆者の立場としては 2 に賛同する。そもそも宇野弘蔵が価値の形態規定に先行して価値実体の議論を行うことを避けた理由は、『資本論』の内容を論理的に純化しつつも、それが特殊歴史的な規制を受けているということを示したかったからであり、資本主義的生産様式という特殊性をあぶりだすためにも、流通論の段階ではあえて商品の生産様式を括弧にくくり、貨幣から資本への転化において、労働力商品という歴史的視角が要請されることを明らかにしたのである。もし仮に、流通

[10] 大内［1977］84 頁を参照。
[11] 同上 94 頁を参照。

論における商品の性格を資本主義的商品に限定してしまうのであれば、このような歴史性が原理論の内部に介入する余地はない。むしろ資本主義的商品の価値という意味であれば、労働力商品の再生産を必要条件とする価値法則（〈商品―労働力〉）で十分なのであって、わざわざそれとは別個に〈商品―貨幣〉という軸で展開される価値形態論を説く必然性がなくなる。

- 純粋派においては、流通論が純粋資本主義内の論理であると主張することで、先述の一回きりの歴史性が後景に退く。世界派の系譜に連なる侘美光彦は『世界資本主義』において、冒頭商品を純粋な資本主義的商品であると規定する純粋派に対し、以下のような批判を展開する。

  「いうまでもなく冒頭の商品論は、これから展開されるべき資本主義的社会とはいかなるものであるかを明らかにする前提として、その社会のもっとも抽象的かつ一般的規定としての商品形態を論じたものである。したがって冒頭の商品世界は、近代的土地所有も、賃労働も、資本も、そしてさらに貨幣もさしあたり捨象され、すべての関係がまだ共通に商品形態としてのみあらわれるような世界にとどまっているはずである。このとき、産業資本、賃労働、そして近代的土地所有という三つの範疇からのみ成り立つとする「純粋の資本主義社会」があらかじめどのように想定されうるのであろうか、疑問が生じざるをえない。ここでは、このような概念自体が未規定であり、「純粋資本主義」社会の概念そのものがまだ明確にされえないはずだからでる。あるいは一歩ゆずって、かりにあらかじめ『原論』の展開に先立って「純粋の資本主義社会」が想定され、そのうえで、このような三つの範疇が捨象されたとしても、「純粋の資本主義社会」の規定性が、どのように冒頭商品の形態規定に残りうるのか、またそれに間接的にでも反映しうるのか、疑問である。このばあい、労働力商品なる特殊な商品が最初から直接にとりあげられることはありえないことであり、むしろそこでは、たんなる労働生産物ではない労働力をも商品化しうるような、商品形態としての一般的性格が明らかにされ、したがって、冒頭の商品には労働力商品をも含みうることが、消極的にしめされるにとどまるであろうからである[12]」。

- 純粋派に対する世界派の批判は、流通論の段階で純粋資本主義を想定することはできないということ、したがって、価値形態論では歴史的単純商品とおよび資本主義商品の両者に貫徹される形態的共通性を解き明かすのであり、抽象的で一般的な商品の価値表現が問題とされなくてはならない、ということである。これはもちろん、歴史的に存在する商品諸形態をすべて列挙して、その共通性をあぶり出すという歴史学的なアプローチとは異なる。我々が実際に抽象作業を行うとき、その対象とされているのはあくまで資本主義的商品であって、その背後に控える資本主義的な生産様式を捨象した結果として、抽象的で一般的な商品が提示されるに至るということである。これについては大内秀明の価値形態論の解釈が同様の内容を示している。したがって、もし抽象の結果として、資本主義的な商品の性格が色濃く出ているのであるとすれば、それは、生産局面の捨象が不十分であるということにほかならない。

2-2　価値形態論の空間的規定

- では、仮に抽象的な流通領域を想定した場合、リンネルと上着という二種類の商品が存在するとして、これら二商品は一体、どのような出会い方をするのであろうか。ここで鍵をなすのが、宇野が価値形態を論

[12] 侘美［1980］158 頁を参照。

じる際にしばしば強調してきた「共同体の終わるところに」というフレーズである[13]。これ自体を歴史的な意味合いで解釈するならば、交換という経済原理がまずは共同体の外で発生し、それが内部に反射して、最終的には国内市場を形成したという、ポランニーの『大転換』のような論理展開を辿ることになる。しかしながら、価値形態論は確かに資本主義的商品に限定される議論ではないものの、かといって歴史的単純商品における価値表現を素朴に歴史学的に記述したものでもない。したがって「共同体の終わるところ」という含蓄の深い言葉については、これを字義通りの歴史的な交換発生の場として読むこと（マルクスの書き方はそのようになっている）を退け、流通という領域が「歴史貫通的」に持っている意味合いとして、すなわち、ある個人が自分とは共通の価値尺度を有していない可能性のある他者と出会う場所、という意味合いで解釈し直す必要がある。以下では、より細かい吟味を行う。

- ここで、商品交換のあり得る可能性を、資本主義以前の共同体と資本主義社会を軸にして列挙してみると、以下の五つにまとめることができる。

① 資本主義以前の共同体内部での商品交換
② 資本主義以前の共同体と共同体の間での商品交換
③ 資本主義以前の共同体と資本主義社会との間での商品交換
④ 資本主義社会内部での商品交換（国内市場）
⑤ 資本主義社会と資本主義社会の間での商品交換（国際市場）

- さてここで、交換される商品同士の間に共通の価値尺度が存在している場合はどれにあたるかというと、これは①と④と⑤になる。逆にいえば、②と③においては共通の価値尺度が存在していない。ただし、ここでは注意が必要である。例えば①の場合、すなわち共同体内部においては、いわゆる我々が想定しているような商品交換は存在していなかったことが明らかになっている。人類学や歴史学の見地からいえば、共同体内部において成立していたのは互酬性に基づく贈与交換、あるいは再分配だったからである。個人間での物品のやり取りがあったとしても、それは家族の中での物のやり取りのようなもので、商品交換という形はとらなかったのであり、したがって①は本来除外されなくてはならない。
- 続いて④と⑤に関してだが、宇野派の、とくに純粋資本主義派の主張によれば、両者は原理論の枠内において本質的に差異がないものとされてきた。これは、国際貿易といえども基本的には国内貿易の延長であって、国家間での商品交換に際しても最終的には価値法則が貫徹されるという見通しが、彼らにはあったからである。ただし、実情は異なっている。価値法則が貫徹されるということは、国際貿易においても労働力商品の価値に基づいた商品価格決定がなされるということになるが、確かに一国内の労働力商品が原理的に均質化されているにしても、現実において、国という枠組みを越えてまで労働力商品が均質化されているわけではない。実際には、各国の人件費の差異を利用する形で資本主義は成長しているのであって、国際貿易においても労働力商品を基準とした価値法則が貫徹されているとはいえない

[13] 宇野は『資本論』における「商品交換は、共同体の終わるところに、すなわち共同体が他の共同体または他の共同体の成員と接触する点に始まる」（Marx[1867]p.102）という一節を非常に重んじ、これを引用しつつ、「商品交換の発生の事実はともかくとして、私は、この言葉をもって商品経済の性格の基本的一面を明らかにするものと考えている。共同体の内部においていかなる制度の下にいかなる方法で生産されたかを問わず、その生産物が他の共同体との間で商品として交換されるということが、商品に特有なる関係を展開する」（宇野［1962］11 頁を参照）と述べている。

だろう。むしろ、国際貿易における有効な価値尺度は基軸通貨の存在である。覇権国の通貨が金とリンクしているかどうかは一時括弧にくくるにしても、とりあえず 19 世紀の国際貿易の要はポンドであったということ、また、20 世紀の中心はドルであったということは確かである。以上のような事情を踏まえ、国際貿易にまで労働力商品を重心に据える価値法則を適用することは困難であるという観点から、筆者は④と⑤を峻別することにする。

- さてここからは、商品交換において背後に存在している生産領域を捨象し、純粋な流通領域を抽出してくる作業を行っていく。実際に理論構築の際の模写の対象とされているのは、資本主義社会における商品なのだから、上記における③、④、⑤に焦点を当てなくてはならないわけだが、従来の宇野派内部においては、すでにこの時点でずれが生じていた。例えば、純粋派が模写の対象としてきたのが、上記の区分でいう④にあたるのに対し、世界派に括られる鈴木鴻一郎と侘美光彦は③を、同じく世界派の岩田弘は②と⑤を、それぞれ自身の想定する流通領域として分析の対象としてきた。しかし、資本主義の商品から抽象化を行う以上、我々の対象として取り扱わなくてはならないのは、③、④、⑤の三つである。その上で、これらの三つから、背景に控える生産領域、すなわち資本主義的生産様式を各々捨象するとどうなるであろうか。結論を述べると、③においてはもちろんのこと、④と⑤においても、商品同士の共約性が消失することが明らかになる。これは 2-1 でも確認したとおり、②との形態的共通性が浮かびあがってくるということ（大内秀明［1977］84 頁を参照）でもある。
- つまり、互いに異なる流通圏に属している二商品が出会っているというのが、我々が抽象の結果として導きだす純粋な流通領域である。純粋な流通領域においては、非資本主義的商品と非資本主義的商品、資本主義的商品と非資本主義的商品、資本主義的商品と資本主義的商品といった、あらゆる商品種類の出会われ方が想定されつつ、それを一つには限定できないような理論的な開かれが生じている。そしてこのことを哲学的に言い直すと、流通領域とは、共約不可能な他者との出会いの場であるということになる。
- 純化された流通領域においては、それが資本主義以前の共同体間にしても、資本主義確立以後の国内市場あるいは国際市場にしても、自分が想定している価値通りには商品を購入してくれない他者との接触の可能性が不可避的につきまとう。むしろ、抽象的に導出された流通領域だからこそ、個別具体的な市場よりもはるかに他者の他者性が際立ち、その「外部」としての性質が顕在化するのだ。価値形態論は、このような他者との出会いにおいていかにして商品の価値が表現されるのか、またその過程でいかにして貨幣が導出されるのかを論理的に追うのが目的である。
- この意味で、本稿で扱っている意味での価値形態論における貨幣は、外部的な貨幣である、ということになる。ちなみに、かつてマックス・ウェーバーは、共同体内部における内的な支払い義務に端を発する内部貨幣と、対外商業において一般的交換手段として機能した外部貨幣を峻別し、この「対外的な貨幣が共同体内の経済に侵入してきた[14]」と述べていたが、筆者もまた、資本主義的貨幣の出発点には、この外部貨幣（あくまで理論的に純化させたものではあるが）を据える。

[14] マックス・ウェーバー『一般社会経済史要論（下）』青山秀夫・黒正巌訳　73 頁を参照。

2-3　価値形態論の視座の規定

- 第二節でも指摘したとおり、宇野派の特徴は価値形態論を人間語でもって記述する点にある。もちろんこれに対しては、久留間派を中心に様々な批判がなされてきたわけであるが、久留間派の言い分にも一理ある。彼らは、価値形態論に登場する商品は資本主義内部の商品であるため、その価値は抽象的人間労働によって規定されており（労働価値説）、したがって、人間が主体的に価値量を決定する余地は存在しない、と考えているのである。しかしながら筆者は、価値形態論で扱われる領域が生産局面を捨象した流通局面であるが故に、資本主義という時代的制約を離れ歴史貫通的な意味合いを帯びているということ、そしてそれにより、共通の生産様式を有さない他者と接するという意味で、外部性が顕在化してくる場として機能しているということを 2-2 で確認した。この観点に立つ限り、筆者は価値形態論における人間語の語りが必要不可欠であると考える。本節はその吟味を行う。
- 流通領域を人間語で語ることの意義を、山口重克は川合一郎の提起した概念（「行く先論アプローチ」/「行動論アプローチ」）を援用しつつ、以下のように論じている。

  「かつて川合一郎は「信用論における理論と行動」という論文で、経済理論の展開方法には対象を「論理的に演繹して導出する」方法と、たとえば商品所有者というような経済「主体の行動のなかからうみだされるものとして、その過程の観察から」導出する方法との二つがあるとし、前者を「論理的演繹アプローチ」あるいは「行く先論アプローチ」と呼び、後者を「行動論的・発生論的アプローチ」あるいは簡略化して「行動論アプローチ」と呼んだ。（中略）たとえば、川合は、価値形態論と交換過程論についての久留間鮫造と宇野との論争における久留間説を次のように要約する。すなわち、久留間説は、価値形態論は商品所有者の欲望やその行動的側面をいっさい捨象して、価値の本質そのものの展開によって貨幣の必然性を立証しようとするものであり、交換過程論は商品所有者の試行錯誤の行動のなかで貨幣が析出されてゆく経過を観察するものであるという解釈を提起したものであると。そして、価値形態論で「行く先」が示されているからこそ、交換過程論において分析者は所有者たちの貨幣にいたる模索過程もフォローできるのであるといって、川合は久留間を評価する。川合は、この二つのアプローチは相補的なものであり、「いずれが欠けても十全の説明はできない」と考えている[15]」。

  「分析者は演出者としてシナリオどおりに舞台が進行するように登場人物を誘導するのが仕事であるということはいってもよい。分析者はここまではしてもよい。しかし、原理論という舞台では、分析者はそれ以上のことはしてはならない。（中略）舞台は当事者の論理で進行しなければならないのであり、分析者はあくまで受身の進行係に自らの役割を限定しなければならない。（中略）いいかえれば、行動論アプローチといっても、分析者がいる以上多かれ少なかれ行く先論アプローチが組み合わされざるをえないが、その場合にも分析者が予定していた行く先は、当事者との関係で変更されることがありうるものとして設定されると考えなければならないのである[16]」。

  「「人間の行動」が意図せざる結果としてではあるが、不断に不均衡化する社会的生産の不断の均衡編成を達成し、不断に変動する需要供給を不断に調整し、法則を実現するという問題が、「攪乱的要素の捨象」と表現されているのである。こうしてここでは、原理論が模写するという方法というのは、このような意

---

[15] 山口［1987］3 頁を参照。

[16] 同上 8 頁を参照。

味での「捨象」の「様式」のことである。すなわち、方法の模写とは純粋資本主義を構成する経済主体の商品経済的な行動が社会的生産の均衡編成を実現するその様式を模写することであると読むことができるのである[17]」。

- 山口の主張をまとめると以下のようになる。すなわち、分析者が商品から貨幣への論理的な展開を行う際、多かれ少なかれ、結論を先取りする「行き先論アプローチ」が無意識のうちに組み込まれているのであり、これについてはあえて否定はしないが、しかし、それをそのままベタに（久留間的に）「行き先論アプローチ」によって記述するのではなく、あえて「行動論アプローチ」を採用することによって、無政府的で不確定的な要素をはらんだ経済主体の行動の蓄積による意図せざる結果として、ある一定の秩序が形成されるという逆説性を示せるのだ、ということである。
- ここで重要なのは、山口が、宇野にならって商品所有者を価値形態論に登場させたことの意義を、「人間行動の意図せざる結果としての、不断に不均衡化する社会的生産の不断の均衡編成」としてまとめている点である。したがって山口の主張は、驚くほどにスミスの「見えざる手」やハイエクの「自生的秩序」の議論と似通ってくる。他者の商品の使用価値に対する欲望、という主観的な要因を出発点とし、いかにして社会的な価値ないし一般的等価物としての貨幣が導出されるのかを追求する、というのが山口の想定する価値形態論の目的であろう。
- 他方で、宇野が価値形態論において主体の重要性を強調したとき、それはもちろん山口的（ないしハイエク的）な含意があった可能性は大いにあるが、それとは区別して、やはり 2-2 で確認した外部性という契機が重要であったと考えられる。これに関しては、宇野本人の記述よりもむしろ、降旗の説明が説得的である。降旗はマルクスによる交換過程論の記述を参照しつつ、以下のように述べる。

「すなわち、①人間にとって外的なものとしてある使用価値が、②人間の直接的欲望をみたす以上にあり、③しかも、人間が相互に独立する人格として（相互的他者たる関係において）相対する場合、はじめてこのものは商品となりうる、というのである。 商品とは、販売によって他人に手渡されるものである以上、①②の条件は自明であろう。決定的な点は、むしろ③である。つまり、共同体内において、その構成員が直接的必要とする以上に、生産物を生産したところで、直ちにそれが商品化されることはない。商品交換とは、相互に他人同士として対立する二つの独立した人格の間での、自由な意志決定に媒介されて、はじめて実現されるものの特殊な配分関係だからである。ところが共同体内部においては、原則的にこのような独立した相互他者関係は存在しない。人間同士の関係は、共同体という有機体の分肢と分肢との関係にほかならないからである。例えば、現代でも存在する家族という共同体内部の構成員間の関係を考えてみれば、この点はすぐわかるであろう。家庭のなかの使用価値としてのものが、毎日の生活の必要以上に存在するからといって、構成員同士が、これを相互に商品として売買しあうということはおこりえない[18]」。

その上で彼は、商品交換に媒介されていない領域について、以下のように述べる。

「これら商品交換に媒介されない諸生産形態において、「労働の自然形態が……労働の直接に社会的な形態である」というのは、労働の具体的有用労働としての実現が、そのまま同時に抽象的人間労働の適合的配分をなす、ということである。これは、それぞれの人間がはじめからその社会の有機的構成要素として

---

[17] 同上 46 頁を参照。

[18] 降旗［2002］175-176 頁を参照。

規定されているということにもとづく、いわば一種の計画的生産の実現だからである[19]」。

- 降旗および世界派において顕著なのだが、彼らが人間語による価値形態論の記述にこだわるのは、流通領域が持つ外部性においては、人と人とが主体として接せざるをえないというマルクスの記述をことさらに重視するからである。降旗が指摘するように、（歴史的であれ理論的に想定されたものであれ）共同体内にける成員は、その共同体という有機体の分肢でしかありえない。したがって、共同体内部では、自己の所有する物品の価値を吟味する主体が介在する余地が存在しないのである。例えば、アリストテレスが『ニコマコス倫理学』で示した「配分的正義」によれば、ポリスという共同体の内部においては、ポリス的能力主義に基づいて成員の価値が定められ、そこから派生的に彼らの生産物の価値が規定されていた。そのため、そこには価値量を決定する主体性が存在していなかった。しかし、商品交換という場では、それとは異なった原理が作用するのであり、「交換的正義」は「配分的正義」とは明確に峻別されることにアリストテレス自身も気づいていたといえる。
- 筆者の強調点は、理論的に抽象化された流通領域とは、互いに非対称な関係にある商品同士が出会われる場所であって、そこでは、商品所有者同士が共同体の有機的成員（共通の価値連関に基づく世界に埋め込まれた存在）という規定から外れ一主体として対峙しつつ、自己商品の価値表現を強いられるということ、これである。
- 山口が価値形態論の視座として想定するのが、使用価値を欲望する無政府的な主体であるとすれば、筆者の提示する視座は、共通の尺度を持たない他者と対峙したがゆえに、主体として振舞うことを余儀なくされた商品所有者の観点である。この両者の違いは、次節における主体の動機の議論とも密接に関わってくる。これを先取って言うならば、前者の立場から導出される貨幣が流通手段であるのに対し、後者の立場から演繹される貨幣は価値の表現手段、すなわち価値尺度になる。

2-4　価値形態論を駆動する動機の規定

- 1-2 でも確認したとおり、宇野の特異性としては、価値形態論では商品所有者による他者商品の使用価値への欲望が捨象できないと主張したこと、したがって人間語でもって価値形態論を記述し直したという点があげられる。しかしここで重要なのは、使用価値への欲望の有無と人間主体の有無は、別個の問題であるということである。多くの宇野派において両者は同一のものとして語られてきたが、人間主体で価値形態論が展開されるにしても、必ずしもそこでの主体の動機が使用価値への欲望であるとは限らないということである。これは何も、商品交換において使用価値への欲望が全くもって存在しないということを意味してはいない。ただ、それが積極的要因となって価値形態を形成するわけではないということである。
- 価値形態論は歴史的単純商品の価値を吟味しているわけではないため、ここで歴史的な背景を論じるのは好ましくないが、参考のために記述しておく。繰り返しになるが、商品交換はそもそも共同体の外部で発生した現象である。本来、共同体内では商品交換と呼ばれる事象は存在せず、互酬性に基づく贈与交換、あるいは首長を中心とした再分配の原理が支配的であったことは、人類学の領域で明らかにされてきた。仮に交換に近いことが行われていたとしても、それは信用に基づく債権・債務関

[19] 同上 183 頁を参照。

係でもって成り立っていたのであって、少なくとも今日の我々が想像するような瞬間的に取引が成立する貨幣経済とは異なっていたといえよう。

- 共同体内部における物品のやり取りが、生活の必要部分を充たす、いわば使用価値への欲望に基づくものであった可能性は十分に高いが、では他方で、共同体の外部で行われていた交換がはたして使用価値欲望に基づいて行われていたか、という問いも立ててみるべきであろう。むしろ、共同体の外部においては、余剰生産物同士の取引が行われていた考える方が歴史学的にも妥当なのではないだろうか。そもそも、他の共同体の物品を入手しなければ存続できないような共同体は、自足的で有機的な共同体としての資格を有していない。宇野が主張したように、歴史貫通的に経済原則が存在し、それが前資本主義的な社会にも妥当するのであれば、その社会は少なくとも自身の共同体内部で、共同体の成員を再生産することが可能でなくてはならないはずである。まとめると、使用価値の充足は共同体内部の生産によってある程度まかなわれており、生産過程で余った部分が、他の共同体の奢侈品等の交換に充てられていたということになる。

  共同体内部→使用価値の生産

  共同体外部→余剰生産物の交換

- 歴史的な議論は以上で切り上げ、今日の資本主義社会における商品交換のあり方を抽象化してみる。問いは明確である。資本家ははたして使用価値への欲望にしたがって行動しているのだろうか、ということである。実際に彼らは、自身の生活を充たすには十分すぎる富を得てもなお、商品取引を行っているはずである。そもそも、商人にしても資本家にしても、彼らは商品の売り手である。確かに彼らが自分の生活に必要な分の商品を買うことはあるだろうし、自身の商品を生産するのに必要な材料を購入することもあるだろうが、彼らが商人や資本家として行動しているとき、彼らの最終目的は、自身の商品を売ることでそれを貨幣へと変換することである。つまり、彼らは買い手である以前に、売り手なのである。仮にここで登場した貨幣をも捨象するとすればどうなるか。その場合、商品を貨幣に転化させようとする欲望は、商品の価値を実現しようとする欲望であると言いかえることができるはずである。したがって、価値形態論を牽引する動機を歴史的にではなく論理的に記述するならば、それは商品所有者による自己の商品の価値実現である、ということになる。
- 山口は行動論アプローチの重要性を指摘し、主体に則し、彼らの思考を追体験する形で価値形態論の記述を試みた。山口の試みは確かに重要だが、しかしその際、商品所有者が商品交換を遂行するときの動機（欲望）がはたしてどのようなものなのかについて、あまり踏み込んだ議論がされてこなかったように思われる。例えば山口に先駆けて宇野も、価値形態論の出発点を、上着 1 着を手に入れるためにリンネル 20 ヤールを等置することであるとしている。上着の入手のためにリンネルを等置するという行為それ自体が誤りであるとはいえないが、しかしこれは、上着を購入したいと欲する買い手の視点での欲望である。つまり、資本主義社会にあてはめてみれば、上着 1 着のためにどれだけのお金を支出してもよいのかを悩んでいる消費者の視点なのである。つまり宇野は、商品交換を考察するにあたって、正確には商品の売り手としての商人ではなく、商品の買い手の欲望で論理を組み立てているということになる。
- 実は、買い手の視点から商品交換を考察し貨幣の必然性を論証するという手法は、正統派の経済学においてはむしろ主流である。アダム・スミスの『国富論』やカール・メンガーの『国民経済学原理』に見られる貨幣発生論は、基本的に他者商品の使用価値ないし効用に対する志向性を出発点に据え

た買い手の側の主観的価値論となっている。基本的に、このような使用価値ないし効用価値に基づく貨幣発生論は、「欲望の二重の一致の困難」という議論を経て貨幣の導出をはかるわけであるが、しかし、はたしてマルクスの価値形態論はこのような議論の亜種なのであろうか？

- 確かにマルクスは交換過程論において、商品所有者の欲望として、他者商品の使用価値への欲望をあげてはいる。しかしながら同時に、一般的な社会的過程としての価値実現についても言及していたことを看過してはならない。

  「どの商品所持者も、自分の欲望を満足させる使用価値をもつ別の商品とひきかえにでなければ自分の商品を手放そうとはしない。そのかぎりでは、交換は彼にとってただ個人的な過程でしかない。他方では、彼は自分の商品を価値として実現しようとする。すなわち、自分の気にいった同じ価値の他の商品でさえあれば、その商品の所持者にとって彼自身の商品が使用価値をもっているかどうかにかかわりなく、どれででも実現しようとする。そのかぎりでは、交換は彼にとって一般的な社会的過程である。だが、同じ過程が、すべての商品所持者にとって同時にただ個人的でありながらまた同時にただ一般的社会的あるということはありえない[20]」。

- すなわち、マルクスはここで、商品交換における個人的な過程と、社会的な過程とを峻別しているのである。一方には、自身の商品を手放すことで他人の商品の使用価値を得ようとする個人的な交換が存在し、他方には、他人の商品の使用価値にかかわらず、自分の商品の価値をそれでもって表現し、その価値等式でもって交換を成立させることで、己の商品の価値実現をはかろうとする社会的な過程が存在するのである。この二つの過程は同一の人格においては共存できない。したがって、価値実現をベースとして売りを担う人間と、使用価値の入手をベースとして買いを担う人間とに分離する形で、交換過程内部における矛盾が外化され、止揚されるのである。

  売り手：自己商品の価値実現→社会的過程

  買い手：他者商品の使用価値→個人的過程

  前者は、資本主義社会における資本家ないし生産者の抽象的表現であり、後者は資本主義社会における消費者の抽象的表現であると言いかえても良いであろう。

- 商品交換においては、売り手と買い手という非対称性が存在する。それはもちろん、資本主義社会における商品保持者と貨幣保持者の二者の非対称性として言いかえることができるが、価値形態論の最初の段階では、資本はおろか貨幣の存在すら捨象されているため、この表現は好ましくない。したがって、自身の商品の価値実現を望む者と、他者の商品の使用価値を望む者、この両者の非対称性であると言いかえねばならない。

- もちろん商品交換においては上記の二要素が並存しているため、どちらの欲望からアプローチして貨幣を理論的に導出するのかが問題となってくる。そして学説史的に見れば、マルクスは価値表現・価値実現の側からアプローチし、スミスやメンガーは使用価値の側からアプローチしたといえるだろう。これに関し筆者は、どちらのアプローチであっても最終的には貨幣の導出ができると考えており、その意味で両論は貨幣論としては等価であると見なしている。ただし、留保をつける必要がある。マルクスの『資本論』は、確かに商品分析から始まって貨幣の導出へと進んでいくものの、最終的には資本を論証することを目的としていた。そのため、価値形態論は本来、貨幣から資本への転化をも見据えたものでなくてはならず、価

[20] Marx[1867]p.101 を参照。

値形態論において導出された貨幣には、資本へと転化する可能性が胚胎していなくてはならない。そして結論から先に言えば、使用価値への欲望に着目するという後者のアプローチを採用した場合、商品から貨幣への展開までは導出できたにしても、貨幣から資本への転化までは説ききることはできないと筆者は考えている。

3-1　他者商品の使用価値に対する欲望を動機とした価値形態論―買い手的価値形態論

- 価値形態論において、商品所有者による使用価値への欲望に重点を置いたのは宇野であったが、彼の価値形態論の記述の不十分さを指摘した上で、より使用価値の側に寄せて記述し直したのは、日高普の『経済原論』であった。そして、山口重克や小幡道昭の議論も、基本的にはその延長線上にあると筆者は考えている。本節では、日高・山口・小幡の三者のうち、最も新しい形態である小幡の価値形態論を吟味していく。
- ―買い手的価値形態論―（小幡［2009］35-44 頁を参照）

以下、上着を欲しているリンネル所有者の視点を追体験する形で思考実験を行う。

〈簡単な価値形態〉

リンネル所有者は上着を欲している。まずは、必要とされる上着の量が決まるであろう。今回、リンネル所有者が欲する上着の量は 1 着であるとする。彼はこの上着 1 着を手に入れるために、対価として自己が有するリンネルを提示する。しかし、上着所有者がどれほどのリンネルを欲することになるのかはこの段階ではわからない。従って、上着 1 着に対置されるリンネルの量は、あくまでリンネル所有者の観念のうちに存在するのである。

リンネル 20 ヤール→上着 1 着

ここでは、上に記した関係がリンネルの価値表現となる。

〈拡大された価値形態〉

上着所有者が上記の価値表現を受諾して、リンネル 20 ヤールと引き換えに上着 1 着を交換してくれれば問題はないが、商品交換はそう簡単にいくわけではない。単純にリンネルの量の問題であればまだ良いものの、場合によっては、そもそもはじめから上着所有者がリンネルを欲していないこともある。したがって、リンネル所有者は上着所有者が求めている商品をあらかじめ先廻りして手に入れる必要が生じることになり、価値表現の式は拡張される。

リンネル 20 ヤール→茶 4 キログラム
→鉄 1/2 キログラム
→小麦 1 キログラム
・・・・・

〈一般的価値形態〉

商品所有者の直接的欲求（例えば上着 1 着への欲求）は、特定の指向性を帯びており代替不可能であるが、対象を手に入れるための手段として欲せられる商品に関しては、そのような制約はない。もしここで仮に、全ての商品所有者が共通の等価物を選ぶのであれば、間接交換は非常に容易になるであろう。つまり等価物の統一に対する一般的要請が生じることになるので

ある。例えば、上記のようにリンネル所有者は間接交換の手段として茶を欲している。同様にして、上着所有者や鉄所有者、小麦所有者も茶を欲しているとしよう。その場合、茶こそが一般的等価物の地位に置かれ、以下のような価値関係が成立する。

リンネル 20 ヤール＝茶 4 キログラム
上着 2 着　　＝茶 8 キログラム
鉄 1 キログラム　＝茶 6 キログラム
小麦 3 キログラム ＝茶 10 キログラム
・・・・・

〈貨幣形態〉

一般的等価物は必ずしも茶である必要はない。時と場合によっては、リンネルや上着がその地位につくことは十分考えられる。しかし、このような等価物が時点をまたいで固定された場合、それは貨幣と呼ばれることになる。歴史的には、この貨幣の地位に金が据えられることになった。

1 ヤールのリンネル＝金 0.05 オンス
1 着の上着　　＝金 1 オンス
1 トンの鉄　　＝金 3 オンス
・・・・・

- 小幡原論の特徴は、第三形態の等価形態に茶を据えた所にある。これは、一般的等価物の地位にリンネルを持ってきたマルクス、ないし宇野（そして鈴木）の価値形態論とは大きく異なる点である。マルクスの場合、価値形態論全体の流れは、リンネルの価値表現が如何にして行われるかという観点でもって一貫している。しかしながら、日高から小幡にかけての価値形態論においては、リンネルはあくまで上着を得るための手段にすぎず、リンネルでは上着を譲ってもらえないと考えたリンネル所有者は、上着所有者の欲望を先廻りする形で茶を入手する、という論理展開を辿る。つまり、小幡の価値形態論にとって重要なのは、リンネルの価値表現ではなく、流通手段としての茶の導出が如何にして行われるか、という点にある。
- 日高から小幡にかけての価値形態論がはらむ問題は、装いとしてマルクスの価値形態論の議論に似せているものの、論理展開だけを抽出すれば、「欲望の二重の一致の困難」から貨幣を要請する古典派・新古典派的な貨幣論となんら大差ない点にある。すなわち、左辺の商品の価値を右辺の商品の使用価値でもって表現するという価値形態論の最も基本的な叙述が貫かれているのは、あくまで第一、第二形態までであって、第三形態以降はそのような記述を持ち出さずとも、十分事足りているということである。
- また、小幡価値形態論においては視点の変更が第二形態から第三形態の間で生じてしていることも、問題の一つであるといえる。そもそも宇野弘蔵および鈴木鴻一郎の価値形態論の特徴として、第二形態から第三形態への移行に際し、マルクスや久留間派が説くような逆連関という視点変更を禁欲した点があげられる。他方で小幡の場合、第二形態まではリンネル所有者の視点を追体験していた行動論アプローチの分析者が、第三形態においては共同主観的で事後的な観察者にすり替わってしまっている。しかし、あくまで価値形態論は、リンネル所有者の視点の追体験での記述を貫徹すべきではなかったのだろうか？

3-2　自己商品の価値表現、および価値実現を動機とした価値形態論―売り手的価値形態論

- 筆者は 2-1 から 2-4 までの流れを受けて、価値形態論の背景をなす条件を以下のように定める。

一、価値形態論では、生産関係を捨象された流通領域に焦点が当てられており、資本主義的商品に限らず、歴史的単純商品にも貫徹される商品価値の原理的解明が目指されている。→2-1
二、生産関係を捨象された流通領域とは、ある一者が、自身とは商品の生産において共通の条件を有さない他者との出会いの場である。→2-2
三、外部空間における商品所有者は、共同体的な価値の連関に埋没することなく、一主体として他者と対峙する必要がある。したがって価値形態の展開は人間主体で遂行されるのであって、人間を排した商品空間における商品語でもって語られるのではない。→2-3
四、外部における商品交換において主体を駆動する動機は、他者の使用価値に対する欲望である以上に、自己の商品の価値を他者によって承認してもらうことである。商品所有者は、外部において買い手である以前に売り手として振舞うのであり、分析者による行動論アプローチは、商品所有者の売り手的欲望、すなわち価値実現および価値表現の追体験として遂行される必要がある。→2-4

- 3-1 では、具体的に使用価値軸の買い手的価値形態論の記述を確認したが、そこでの問題点を踏まえ、筆者の売り手的―価値実現軸の価値形態論の記述に際し、注意したポイントを以下にまとめる。

五、価値形態論の記述は、あくまでリンネル所有者の事前的な視点で記述されるのであり、視点の変更を不用意に行ってはならない。
六、リンネル所有者の欲望は、自身の商品であるリンネルの価値実現、およびその前段階としてのリンネルの価値表現である。
七、第三形態において一般的等価物の地位につくのは、第三者的商品である茶ではなく、リンネルにほかならない。
八、価値表現の式における左辺の商品は、価値を表現してもらう側であり、右辺は自身の使用価値でもって左辺の価値を表現する側であることを、第一、二形態のみならず、第三、貨幣形態においても常に念頭に置いておく。

以上の八つのポイントを押さえた上で、筆者なりの価値形態論の記述を以下に行う。

- ―売り手的価値形態論―

〈簡単な価値形態〉

リンネル所有者は自分のリンネルの価値を他者によって承認してもらうことを欲し、その価値を交換を通じて実現しようと欲する。しかし、自己の商品を価値として実現してもらうためには、まずもって自己の商品の価値を表現しなくてはならない。リンネルの価値は自己の使用価値でもって表現することはできない。リンネル 20 ヤールの価値＝リンネル 20 ヤールの使用価値では、同語反復である。従って、リンネルの価値表現においては、他の商品の身体を借用することになる。ここで、リンネル所有者は手持ちのリンネル 20 ヤールの価値表現に際し、上着の身体を選択したとする。

リンネル 20 ヤールの価値→上着 1 着の使用価値

〈拡大された価値形態〉

リンネル所有者は、リンネルの価値表現をなにも上着の身体に限定する必要はない。上着所有者がリンネルを欲しておらず、したがって上着との交換によるリンネルの価値の実現が不可能であるとわかったのであれば、リンネル所有者は自身の商品の価値表現のあり方を他の商品に対しても拡張するであろう。すなわち、価値を表現するための価値体が茶、コーヒー、小麦･･･といった具合に増大することになる。

リンネル 20 ヤールの価値→茶 4 キログラムの使用価値
→鉄 1/2 キログラムの使用価値
→小麦 1 キログラムの使用価値
・・・・・

〈一般的価値形態〉

上記の〈拡大された価値形態〉においては、リンネル 20 ヤールの価値表現は、異なる様々な商品との関係へと拡張する。リンネル商品の価値実現はこれら全ての価値表現の実現と同義となるのである。しかし、右辺に位置する商品は際限なく増大するわけであり、その価値実現は〈簡単な価値形態〉の時よりもむしろ困難になったと言わざるをえない。リンネル所有者はこの問題を、自らの視点の切り替えによって乗り越えるほかなくなる。これが、いわゆる対他的対自の視点の導入である。廣松渉は二形態から第三形態への移行に関して以下のように述べている。

「この第三形態というのは、第二形態での相対的価値形態の側に対自的にあったリンネル生産者・所有者の対他的な事態を定式化したものである。それゆえ、上空飛翔的に眺めれば、ないしはまた、当事主体たちの即自的な意識にとってみれば、第二形態と第三形態とは同一事であるが、しかし、当事主体の視座にとって対自的な事態と対他的な事態との区別と統一を分析するフェア・ウンスな学知にとっては、両者は異相である[21]」。

廣松はヘーゲルの『精神現象学』に登場する自己意識に関する議論を援用するが、第二形態から第三形態への移行を最も的確に表わしている表現は、ヘーゲルの『エンチクロペディー』の「論理学」にみられる質から量への転化の論理である。ヘーゲルはある存在の質的規定は自己とは異なる他なる存在によってのみ可能になると説くが、「なにか」を他なるもので表現することは、際限なく横滑りすると述べる。

「「なにか」は他のものになる。が、この他のものがそれ自体「なにか」だから、それがまた他のものになる。こうして無限につづく。この無限は悪しき無限、あるいは、否定的な無限である。有限をただ否定しただけの無限で、有限はふたたびすがたをあらわし、克服されることがないのだから。いいかえれば、この無限は有限を克服「すべきだ」と口でいうだけなのだ。無限につづくというのは、有限なものが「なにか」でもあり「他のもの」でもある、という矛盾の言明にとどまっていて、つぎつぎと交代してあらわれる二つの規定をいつまでもただ追いかけているだけである[22]」。

おそらく、これに対応する『資本論』の記述は以下になるであろう。

---

[21] 廣松[1987]199-200 頁を参照。

[22] Hegel[1830]邦訳 216-217 頁を参照。

「第一に、商品の相対的価値表現は未完成である。というのは、その表示の列は完結することがないからである。一つの価値等式が他の価値等式につながってつくる連鎖は、新たな価値表現の材料を与える新たな商品種類が現われるごとに、相変わらずいくらでも引き伸ばされるものである。第二に、この連鎖はばらばらな雑多な価値表現の多彩な寄木細工をなしている。最後に、それぞれの商品の相対的価値はが、当然そうならざるをえないこととして、この展開された形態で表現されるならば、どの商品の相対的価値形態も、他のどの商品の相対的価値形態とも違った無限の価値表現列である。―展開された相対的価値形態の欠陥は、それに対応する等価形態に反映する。ここでは各個の商品種類の現物形態が、無数の他の特殊的等価形態と並んで一つの特殊的等価形態なのだから、およそただそれぞれが互いに排除しあう制限された等価形態があるだけである[23]」。

悪無限の解決策は、ある存在自らが、有限で可変的な存在のようにつねに新たに他の存在のうちに消失するのではなく、むしろ自分のうちに自立的な存立基盤と自分の中心点を見いだすことである。そして、自己を起点とすることで、横滑りする無限は否定され、閉ざされた完結性としての真の無限が立ち現れる。

「他のものへと移行するなかには、自分自身と一つになるしかなく、このように、移行するなかで、そして、他のもののなかで、自分自身と関係することが「真の無限」である。これを否定的にいうと、変化していくものは他のものであり、変化して他のものの他のものとなる。こうして、否定の否定によって存在が回復され、「自分とむきあう存在」があらわれる[24]」。

リンネル所有者は自身の観念のうちで、自己のリンネルを軸に価値表現を編み直すのである。自己のリンネルの価値を他の商品の使用価値でもって表現することをやめ、対他的に捉えた自己のリンネルの使用価値でもって、他の全ての商品の価値を表現するのである。こうしてリンネルと諸商品との関係は顚倒され、リンネルこそが等価形態の地位につく。一般的等価物はあくまでリンネルであって、茶ではないのである。また、今までは即自的にリンネルの価値の実現が目指されてきたが、これ以降は、自己の商品を疎外した上で成立するリンネル所有者の観念のうちで完結された諸商品体系の価値実現こそが、彼の商品交換の動機となるのである。

上着 1 着の価値　　→リンネル 20 ヤールの使用価値
茶 1 キログラムの価値　→リンネル 5 ヤールの使用価値
鉄 1 キログラムの価値　→リンネル 40 ヤールの使用価値
小麦 1 キログラムの価値 →リンネル 20 ヤールの使用価値
・・・・・

〈貨幣形態〉

第二形態から第三形態への移行はあくまでリンネル所有者の観念のうちでの顚倒である。日高や山口が提示する、個人から集団への視点の変更は、他者商品の使用価値への欲望という側面から説き起こすことで生じるものであり、自己商品の価値表現に徹したここまでの論理においては、これを導入する必要はない。むしろ視点を変更せざるをえなくなるとすれば、第三形態から貨幣形態への移行においてであろう。上記のような自己商品の左辺から右辺への顚倒は、必ずしもリンネル所

[23] Marx[1867]p.78.

[24] Hegel[1830]邦訳 219 頁を参照。

有者のみが行うものではない。他の商品所有者も同様の発想をとるのであり、従って、商品所有者同士の競合とは、自己の商品を起点に据えた上で観念的に成立する各々の価値表現の実現を目指す競合になる[25]。競合を通じて各々の商品所有者は自らの観念的価値形態を修正していくが、その際最も変動することが少なく、従って価値変動の中心に居続けることが可能だった商品が貨幣と呼ばれるようになったのである。つまり、貨幣形態とは金所有者の潜勢的で観念的な価値表現が具現化したもの、すなわちその現象形態を意味することになる。

- 貨幣形態へと至ることで価値形態論は一度幕を下ろすが、ここで重要なのは、第三形態におけるリンネル、および貨幣形態における金が如何に特殊な存在なのかに関しての分析である。ここでは金に議論を絞る。金はその身体（使用価値）でもって他の全ての諸商品の価値を表象する特権的商品である。金のおかげで諸商品は価値を量的に表現される。しかし、当の金自身はどうであろうか。金は全ての商品に対して自らの使用価値を差し出す奴隷なのであり、彼自身の価値は質的には何ら表現されていない。等価形態に立たされた価値体（例えば上着）の価値が自身の使用価値とははっきりと区別されていたように、金自身の価値は、全商品を表象する過剰なまでの使用価値でもって表現されることは決してなく、ここに、価値の質的表現の欠如が、諸商品空間のまさに中心部分においてこそ露骨に出現するわけである[26]。
- ここで再びヘーゲルの議論が重要になる。ヘーゲルは質としての存在が「自分とむきあう存在」へと転化することで、その存在は個々の質的規定性から解放されて量の次元に到達すると述べる。
  「質的な規定は、一のうちで完全無欠の規定に達したのだが、つぎにはこの規定の克服が生じ、量としての存在があらわれる[27]」。
  「この質の克服は、抽象的な無でもなければ、抽象的で無規定な存在でもなく、規定にたいしてかかわりをもたぬ存在というものであって、この存在の形態が、常識的には「量」ともとらえられる[28]」。
- 金の価値の欠如は、他者の身体を借りる質的規定によって充たされるのではなく、量的規定のうち

---

[25] 『資本論』の初版においてはこの競合関係が明記されていた。

[26] スラヴォイ・ジジェクは、貨幣の機能を超越論的シニフィアンに擬え、この特権的なシニフィアンの機能によって他のシニフィアンの意味の横滑りが止められると主張する。ただその時の注意点として彼があげるのが、この超越論的シニフィアンのシニフィエ（価値）は直接的に表象されておらず、その欠如が露呈しているということである。
「シニフィエの換喩的な横滑りを食い止めることによってあるイデオロギーを全体化する「固定指示子」は、〈意味〉が最高潮に凝縮されている点ではない。つまり、それ自身は諸要素の差異的な相互作用から逃れられているために安定・固定した指示点（参照基準点）として機能する一種の〈保証人〉ではない。逆に、固定指示子は、シニフィエの領域においてシニフィアンを代表する要素なのである。それ自身は「純粋な差異」以外の何物でもない。その役割は純粋に構造的で、その性質は純粋に遂行的で、その意味作用はそれ自身の言表行為と合致する。要するに、固定指示子とは「シニフィエなきシニフィアン」なのである」（ジジェク［1989］190 頁を参照）。

[27] Hegel[1830] 邦訳 225 頁を参照。

[28] 同上 227 頁を参照。

で代補されることになる。これはすなわち、貨幣の価値の所在がその質においてではなく、姿態変換を通じて生じる量的差異の恒常的反復（差異の反復）のうちに見いだされることを意味しており、価値増殖の契機としての資本運動こそがこの貨幣の価値表現であるということを示している。

- つまり、商品の価値は貨幣によって表現され、貨幣の価値は資本によって表現されるわけである。ここで重要なのは、第二形態から第三形態にかけて、リンネルから茶へ、といった視点変更を経なかったことにより、「商品―貨幣―資本」の三位一体を、総てリンネルの価値表現のバリエーションとして捉えることができるようになる、ということである。というのも、はじめに商品リンネルがあり、それが自身を疎外して貨幣となることで他商品を表象し、貨幣（リンネル）を量的に増殖させることで資本へと転化するからである。商品としてのリンネルの価値表現は貨幣としてのリンネルによって可能になり、貨幣としてのリンネルの価値表現は、資本としてのリンネルによって可能となる[29]。こうして、マルクスが、資本の本質は貨幣であり貨幣の本質は商品である、とした理由が明らかになるのだ。「商品―貨幣―資本」という三位一体は、リンネルの価値表現の論理的展開である。したがって、もし仮に、論理の途中でリンネルから茶へと分析の対象をずらしてしまっては、このような「商品―貨幣―資本」の本質的一貫性を論じることが不可能になるだろう。

―まとめ―

リンネルは質的に自身の価値を表現しようとする（商品的リンネル）。

↓第二形態の段階で限界が生じる。

リンネルは自身を疎外することで、他の商品の価値を量的に表現する（貨幣的リンネル）。

↓貨幣形態の記述は、歴史的にはこの貨幣の位置に金が来たことを示す。

一般的等価物としてのリンネルは、自己の量的差異によってその価値を表現する（資本的リンネル）。

3-3 ヘーゲルとマルクスを接続することについての補足

- 宇野弘蔵は、自身が所有していたヘーゲル『小論理学』の目次のページに、これと正確に対応させる形で経済原論の目次を書き込んでいる。以下は、その対応関係である[30]。

第一部	有論	流通論
	A 質	商品
	a 有	商品の二要因
	b 定有	交換価値＝価値形態
	c 向自有	貨幣形態＝価格
	B 量	貨幣

- 宇野のメモを確認すると、商品を質と捉え、それが貨幣によって表現されるようになる局面（貨幣形態＝価格）を、「論理学」の向自有（対自存在）の節に正確に対応づけていることがわかる。ヘーゲルの対自存在の議論の要は、記述視点を外的に変更させることなく（例：リンネルから茶）、内的に、すなわち即自から対自への変更（例：即自的リンネルから対自的リンネル）のもとに記述したことで

[29] もちろん、歴史的に貨幣になることができたのはリンネルではなく金であったことは言うまでもない。

[30] 降旗［2002］21-24 頁

ある。宇野自身も『経済原論』において、（確かに価値形態論の出発点に他者商品の使用価値への欲望を持ってきたものの）第三形態の一般的等価物の地位に茶を持ってくることはせず、あくまでそこにはリンネルを据えていた。これは宇野が、使用価値への欲望の重要性を唱えつつも、リンネルの価値表現というマルクスの意図自体は放棄していなかったためである。我々は今一度、第二形態から第三形態への移行も含めた価値形態論全体の記述において、リンネルの価値表現という軸を貫くことで、商品から貨幣へ、そして資本へという流れを切断させることなく論理的に把握し直す必要があるのではないだろうか。

結　価値形態論の論点整理および貨幣と資本の接続

- 本稿の議論をまとめると、以下のようになる。

①価値形態論では、資本主義的商品から生産過程を捨象した、歴史貫通的な抽象的商品の価値を分析する。
②価値形態論で扱われる生産関係を捨象された流通領域とは、ある一者が、自身とは商品の生産において共通の条件を有さない他者と出会う場であり、「外部」空間である。
③「外部」においては、互いに共通の価値尺度を有さない人間同士が主体として対峙することになる。
④価値形態論における主体の動機は、自身の所有する商品の価値を実現すること、すなわち、自身が望む価値表現を他者に承認してもらうことである。
⑤価値形態論においては、一貫してリンネル商品の価値が問題となる。したがって、第二形態から第三形態への移行に際しても、リンネル所有者の視点での分析が貫かれ、第三形態の等価形態に据えられる商品も、あくまでリンネルでなければならない。
⑥ヘーゲルの「質から量への転化」の議論を踏まえることで、第三形態以降、リンネルの価値は質的規定を離れ量的規定へと移行することが明らかになる。
⑦諸商品の価値を表象するリンネルは、自身の価値を自身の使用価値でもって表現することができないため、諸商品体系の中枢に価値の質的欠如が生じることになる。
⑧リンネルの価値の表現は、その量的増殖（量的差異の反復）によって表現される。
⑨リンネルの価値表現を軸に価値形態論を記述し直すことで、商品の価値は貨幣によって表象され、貨幣の価値は資本によって表象されるという、その論理的一貫性が示される。

- 貨幣の量的価値表現としての資本の分析に関しては、紙幅の関係もあり本稿では扱えない。しかし、より本質的な議論はむしろここから始まると言ってよい。資本は、そして資本の担い手である貨幣所有者は無限の価値増殖を欲するが、この価値増殖が、流通論で提示しておいた「外部」において引き続き遂行されるのか、それとも歴史的に登場した労働力商品を包摂することで、生産領域という「内部」へと場を移して遂行されるのかについては、原理論の中でその結論を下すことができない。小幡原論では、前者を姿態変換外接型と呼び、後者を姿態変換内接型と呼んでいるが、今後筆者は、彼が提起したこの区分を参照しつつ、資本の形式論を考察していきたいと考えている。

〈参考文献〉

Hegel, G.W.F. [1830] *Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften I* , Suhrkamp Verlag, Bd.8, Frankfurt, 1983. 長谷川宏訳『論理学』作品社, 2002 年.
Marx, K.[1867] *Das Kapital I* , in Marx-Engels Werke, Bd.23, Berlin, 1962. 岡崎次郎訳『資本論』第一分冊 国民文庫(マルクス＝エンゲルス全集版), 1972 年.
Polanyi, K. [1944] *The Greatest Transformation,* Farrar&Rinehart, New York. 野口建彦・栖原学訳『大転換』東洋経済新報社, 2009 年.
Smith, A. [1776] *The Wealth of Nation,* in Everyman's Library, 1991. 大河内一男訳『国富論』第一分冊, 中公文庫, 1978 年

アリストテレス『ニコマコス倫理学』上巻, 高田三郎訳, 岩波文庫, 1971 年.
ジジェク/S.『イデオロギーの崇高な対象』鈴木晶訳, 河出文庫, 2015 年.
シュトレーク/W.『資本主義はどう終わるか』村沢真保呂・信友建志訳, 河出書房新社, 2017 年.
スゥイージー/P.M.編『論争・マルクス経済学』玉野井芳郎・石垣博美訳, 法政大学出版, 1969 年.
ウェーバー/M『一般社会経済史要論（下)』青山秀夫・黒正巌訳, 1991 年.
岩田弘［1964］『世界資本主義　Ｉ』批評社, 2006 年.
宇野弘蔵［1947］『価値論』こぶし文庫, 1996 年.
宇野弘蔵［1962］「経済学方法論」『宇野弘蔵著作集』第九巻, 岩波書店, 1974 年.
宇野弘蔵［1964］『経済原論』岩波文庫, 2016 年.
宇野弘蔵編［1967］『資本論研究』第一巻, 筑摩書房.
大内秀明［1977］「冒頭商品の性格」佐藤金三郎・岡崎英松・降旗節雄・山口重克編『資本論を学ぶ』第一巻, 有斐閣, 1977 年.
小幡道昭［1988］『価値論の展開』東京大学出版会.
小幡道昭［2009］『経済原論』東京大学出版会.
小幡道昭［2013］『価値論批判』弘文堂.
河上肇［1937］『資本論入門』第一分冊, 青木文庫, 1951 年.
久留間鮫造［1957］『価値形態論と交換過程論』岩波書店.
鈴木鴻一郎［1959］『価値論論争』青木書店.
鈴木鴻一郎［1962, 64］『経済学原理論』上下巻, 東京大学出版会.
大黒弘慈［2015］『模倣と権力の経済学』岩波書店.
侘美光彦［1980］『世界資本主義』日本評論社.
尼寺義弘［1978］『価値形態論』阪南大学叢書.
日高普［1983］『経済原論』有斐閣.
廣松渉［1987］『資本論の哲学』平凡社ライブラリー, 2010 年.
降旗節雄［2002］『宇野経済学の理論体系』社会評論社.
山口重克［1985］『経済原論講義』東京大学出版会.
山口重克［1987］『価値論の射程』東京大学出版会.